様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月　13 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520343
研究課題名（和文）バントゥ諸語における動詞派生形の形態・統語論比較研究

研究課題名（英文）Comparative Studies of the Extended Verb Forms in Bantu Languages

研究代表者：
小森　淳子(KOMORI JUNKO)
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：10376824

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、膠着的特徴をもつバントゥ諸語の動詞派生形について、個別の動詞の記述を行い、動詞派生形の形態と意味、統語的な特徴を明らかにすることである。現地調査や文献資料などから得られた複数のバントゥ諸語のデータを比較・対照して、個々の派生形についての普遍的な特徴と、言語間に見られる相違を分析した。特に統語論的にも重要な「適用形」と「使役形」について、増項する統語的特徴と語彙的な意味の特徴の分析を行った。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this project is to describe the extended verb forms of Bantu languages, which are the typical agglutinative languages having derivative verb forms. We studied various extended verb forms especially focusing on the “applicative form”, which are considered to add the extra arguments to the verb. We gathered data from field works and references which contain data of Bantu verb forms.

From the data, we found that the main function of the applicative form is not necessarily to add an extra argument; rather, one of its important functions is to take an argument of various semantic roles like Beneficiary, Maleficiary, Recipient/Addressee, Goal, Source, Location, Path, Experiencer, Instrument/Means, Content, and Motive/Reason, except Agent and Patient, and relate it to the verb syntactically. Much investigation would be expected on the relation between this syntactical property of the applicative forms and the function of changing meanings of the verb in idiomatic usage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：言語学・バントゥ諸語・アフリカ・動詞派生形・外国語

１．研究開始当初の背景

日本におけるバントゥ諸語研究は、1960 年代からの現地調査に基づく記述研究に始まり、現在に至るまで連綿とフィールド調査による記述研究が続けられている。その研究成果の蓄積は相当量であるが、しかしその研究成果は、個別言語の文法記述や語彙集の編纂などの段階に終始している状況である。また研究分野においても、アクセントなどの音韻研究の分野に偏っている点はいなめない。

日本におけるバントゥ諸語研究の浅からぬ歴史と相当数の研究者を輩出している現状から考えて、音韻分野のみならず、形態論、統語論、意味論においても、通バントゥ的視点にたった研究をすすめるべき時期にある。特に、一般言語学にとっても重要な知見を与える動詞の形態論について、これまで記述されたバントゥ諸語の比較・対照を通して、その類似点と相違点を明らかにし、一般化や理論化を図る作業が求められている。本研究では、動詞の派生形に焦点をあてたが、それは動詞がとる項も関係することであり、統語論を視野に入れた研究であった。

海外のバントゥ諸語の研究においては、通バントゥ諸語研究は進んでおり、そのひとつのまとめとして、Nurse, Derek & G. Philippson (eds.) (2003) The Bantu Languages, London: Routledge. のようなバントゥ諸語全般についての解説本がみられる。しかし、このような労作においてさえ、動詞の派生形といった個別の文法事項についての記述は解説的な段階止まりであり、統語的、意味的特徴まで合わせた包括的な記述とはなっていない。その点からみて、世界のバントゥ諸語研究にとっても、形態論、統語論における総合的な比較研究はさらに精力的に行われるべき分野であり、本研究はその一翼を担うものであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、バントゥ諸語の動詞派生形の記述を行い、それぞれの動詞派生形の形態と意味、統語的な特徴を明らかにすることである。さらに、得られたデータを比較・対照して、個々の派生形についての普遍的な特徴と、言語間に見られる相違を明らかにし、バントゥ諸語の動詞構造についての総合的、包括的記述研究をめざすものである。

具体的には、これまでの研究で最も蓄積が多く、一般言語学的にも「態」(voice)の側

面から大いに着目されている「適用形」(applicative form) について、その派生形の意味と統語特徴を明らかにする。また、「適用形」と同じく、「他動詞化」接辞としても機能しているように見える「使役形」(causative form) について取り上げ、それぞれの言語においての個別性と普遍性を明らかにし、これらの派生形がバントゥ諸語の統語論の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、現地調査によるデータ収集をおこない、文献から得られるデータと総合して分析し、動詞の派生形について包括的な議論と検討を行うという方法をとった。そこで、研究の遂行にあたっては、次の三点を柱とした。

(1)　文献から得られるデータの収集と、アフリカでの現地調査。

(2)　日本の若手バントゥ諸語研究者が参加する研究会の開催。

(3)　(1)と(2)から得られたデータと議論をもとに、総合的な分析結果をとりまとめる。

４．研究成果

本研究では、500 以上もあると言われているバントゥ諸語について一つでも多くの言語のデータを集め、広く比較検討するために、現地調査によるデータ収集をおこなうことと、文献からデータを得ることをまず第一の目的として研究をおこなった。そして、そこから得られたデータを持ち寄り、研究会の形式を通じて個別の言語についての議論と包括的な分析を行い、バントゥ諸語における動詞派生形の普遍性と個別的特徴について議論した。

現地調査のための派遣は、2007 年と 2008 年に連携研究者の米田信子氏がそれぞれタンザニアとナミビアに現地調査に行き、それぞれマテンゴ語とヘレロ語の調査にあたった。

また、研究会については、2007 年度に２回（2007 年５月＠長崎大学（アフリカ学会会場内)、2008 年２月＠千里ライフサイエンスセンター)、2008 年度に１回（2009 年１月＠キャンパスボート大阪)、2009 年度に１回(2009 年５月＠キャンパスポート大阪）もち、研究協力者の研究発表ならびに本研究に関する総合的な議論をおこなった。

これまでのところ、動詞派生形の中でも主に「適用形」と「使役形」について議論してきたが、特に「適用形」については、これまで統語論の中で論じられてきたように動詞がとる「項」の増減はそれほど重要ではなく、むしろ動詞の意味の変化に重点が置かれており、容易に「語彙化」して特殊な意味に変容することが広くみられた。また「適用形」と「使役形」がカバーする意味が言語ごとに異なっており、例えば「道具」を表す意味が「適用形」で表される言語もあれば「使役形」で表す言語もあり、その分布に興味深い点が見られた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①米田 信子、「ヘレロ語における適用形動詞と目的語の対称性」、『アジア・アフリカの言語と言語学』、４号、5-35 頁、2010 年、（査読有）

②米田 信子、「マテンゴ語の動詞活用形とフォーカス」、『スワヒリ＆アフリカ』、20 号、148-164 頁、2009 年、（査読有）

③Komori Junko, “An Outline of Bantu Applicative Constructions: A Range of Semantic Roles of Applied Objects and their Properties”, Tokusu K.(ed) *Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses,* 113-135pp. 2008.（査読無）

④米田 信子、「マテンゴ語の情報構造と語順」、『言語研究』、133 号、107-132 頁、2008 年、（査読有）

〔学会発表〕（計２件）

①米田 信子、「マテンゴ語におけるフォーカス標示と解釈の不一致」、関西言語学会第 34 回大会、2009 年 6 月 6 日、神戸松蔭女子学院大学（兵庫県神戸市）

② Yoneda Nobuko, “The Conjoint/Disjoint Verb Form and Focus in Matengo”, 3rd International Conference on Bantu Languages, 2009 年 3 月 26 日、王立中央アフリカ博物館（ベルギー、テルヴューレン）

〔図書〕（計２件）

①小森 淳子、『世界の言語シリーズ１ スワヒリ語』、大阪大学出版会、216pp、2009 年

②小森　淳子・竹村　景子「第 13 章タンザニアにおけるスワヒリ語の歴史と動態―諸民族語、英語との相克」、砂野・梶（編）『アフリカのことばと社会』、385-418、三元社、2009 年

６．研究組織

(1)研究代表者

小森　淳子(KOMORI JUNKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号：10376824

(2)研究分担者

な　し

(3)連携研究者

米田　信子(YONEDA NOBUKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号：90352955

竹村　景子(TAKEMURA KEIKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号：20252736